

コピュラ文の解釈

—ダケ／シカによる意味特性の判別—

2005 (平成 17) 年入学

言語学・応用言語学専門分野

1LT05145E 村上 望

2012 (平成 24) 年 1 月提出

要旨

コピュラ文の意味に関する分析は様々あるなか、本論文は特に西山(2003)を取り上げ、「指示性」という曖昧な定義に基づく分類の問題点を指摘した。西山(2003)に対し、本論文では、linguistic SR という表記法を用いて語彙の意味特性を表示し、その結果、語彙とコピュラ文の意味を明確に分析した。

さらに、本論文では、コピュラ文「A ハ B ダ」を、「A ダケ(ガ)B ダ」「A シカ B ～ナイ」「B ダケ(ガ)ダ」「B シカ A ～ナイ」などの文に言い換えた場合の容認可能性を観察することによって、「A ハ B ダ」の分類を行った。ダケ／シカによりコピュラ文に生起する A, B をとりたてることにより、A, B それぞれの語彙の意味特性をはっきりと区別することが出来るのである。その結果、コピュラ文「A ハ B ダ」を三種類に分類を行った。また、西山(2003)の分類における「措定文」と「倒置同定文」、「倒置指定文」、「所在コピュラ文」という分類は、本論文における三分類との対応関係がみられた。

目次

1. はじめに.....	1
2. 先行研究（西山 2003）とその問題点.....	2
2.1. 指定文.....	2
2.2. 倒置指定文.....	3
2.3. 所在コピュラ文.....	6
2.4. 倒置同定文.....	7
3. linguistic SR の導入.....	10
3.1. Object Information.....	10
3.2. 修飾関係を表す表記方法.....	11
3.3. 各 SR 式の説明.....	12
3.3.1. x_n 型.....	13
3.3.2. e_n 型.....	14
3.3.3. v_n 型.....	15
3.3.4. p_n 型.....	18
3.4. 西山(2003)の名詞句の定義との比較.....	20
4. コピュラ文の分類におけるとりたて詞ダケ/シカの役割.....	23
4.1. とりたて詞ダケ/シカの意味機能.....	23
4.2. とりたて詞シカと所在文.....	25
5. ダケ/シカ文によるコピュラ文の分類.....	27
5.1. 分類 1.....	27
5.2. 分類 2.....	30
5.3. 分類 3.....	33
5.4. まとめ.....	36
参考文献.....	38

1. はじめに

西山(2003)では、コピュラ文「A ハ B ダ」の分類を行い、各コピュラ文に対する規定を行っている。西山(2003)はコピュラ文の解釈を行う際に、名詞句に対し「指示的名詞句」「非指示的名詞句」「叙述名詞句」「変更名詞句」という分類を行い、それを元にコピュラ文の規定を行っている。しかし、これらの名詞句の定義に問題があるため、西山(2003)におけるコピュラ文の規定は曖昧な箇所が見受けられ、例外とすべき事項が多く存在する。

西山(2003)における名詞句の定義における問題点を解決するために、本論文では linguistic SR を導入する。linguistic SR という観点から考察することで、語彙の意味特性を捉える上での曖昧性が解消されるため、分類後の各コピュラ文における意味構造上の違いを明確に理解することができる。

筆者は、とりたて詞ダケ/シカが持つ機能を利用し、コピュラ文の名詞句 A,B の意味特性をもとにコピュラ文を分類できるのではないかと考えた。そこで本論文では、コピュラ文に生起する名詞句 A,B ととりたて詞ダケ/シカを共起させた文「A ダケ B ダ」「B シカ A~ナイ」(以下、ダケ/シカ文と呼ぶ)の容認性について検証した。検証の結果、ダケ/シカ文の容認性の可否に規則性が見られることが明らかになった。本論文では、検証結果をもとに、コピュラ文を三種類に分類する。また、その三分類は西山(2003)におけるコピュラ文の分類とも相関がみられる。

2. 先行研究（西山 2003）とその問題点

西山(2003)におけるコピュラ文「A ハ B ダ」の分類と規定について説明し、その問題点を指摘する。

2.1. 指定文

西山(2003)は、指定文(predicational sentence)「A ハ B ダ」の解釈及びそれにおける名詞句 A,B の意味特性を(1)のように規定している。

(1) 指定文(predicational sentence)

A で指示される指示対象について、B で表示する属性を帰す。且つ、A は指示的名詞句であり、名詞句 B は叙述名詞句である。

(西山 2003: 123)

さらに、西山(2003)は、それぞれの名詞句の意味機能について(2)(3)のように定義している。

(2) 指示的名詞句

世界のなかの対象(個体)を指示する(refer to)機能をもつ

(3) 叙述名詞句

属性・性質を表す

以下の例文は、指定文の典型的な例として挙げられている。(4)(5)において、名詞句 A は特定の対象を指示しており、名詞句 B は属性・性質を表しているといえる。

(4) 五嶋みどりはヴァイオリニストだ。 (西山 2003: 123 (6))

(5) モーツァルトは天才だ。 (西山 2003: 123 (7))

しかし、(6)において「鯨」は、「五嶋みどり」のように個体を指示しているのではなく、あくまで哺乳動物に属する種であることを述べているだけである。(7)(8)(9)における名詞句 A も同様に、個体であるとはいえない。

(6) 鯨は哺乳類だ。 (西山 2003: 123 (8))

(7) 学生は怠け者だ。 (西山 2003: 123 (9a))

(8) 医者金は持たぬ。 (西山 2003: p.123 (9b))

(9) こんな落書きをする奴は馬鹿だ。 (西山 2003: 124 (10))

西山(2003)では、「これらの文は全て、名詞句 A に対し名詞句 B で表される属性を帰しているのであり、その意味で指定文であるとしている。よって、指定文における指示的名詞句はこれらのケースを全て包括する広い概念である」としているが、この説明は曖昧で、(2)の定義を満たしているとはいえない。よって、(10)の問題点が挙げられる。

(10) 指示的名詞句の定義と、指定文における名詞句 A の意味特性についての説明が一致していない。

また、西山(2003)では、名詞句 B の位置に形容詞や形容動詞が生起する(11)(12)のような例文も指定文であると述べている。

(11) この犬は賢い。 (西山 2003:128 (42))

(12) 洋子は元気だ。 (西山 2003: 128 (44))

西山(2003)は、(11)(12)のよう文が主語名詞句の指示対象について述語の表す属性を帰しているという点で(1)を満たしているので、指定文であるとしている。しかし、形容詞や形容動詞は属性・性質を表してはいるが、あくまでも形容詞・形容動詞なのであって名詞ではないため、(1)の定義を満たしているとはいえない。よって、(13)の問題点が挙げられる。

(13) 指定文における名詞句 B の定義が不十分であり、例外が生じている。

(10)(13)の問題点は、第3章で導入する linguistic SR により解決することができる。

2.2. 倒置指定文

倒置指定文(inverted specificational sentence)「A ハ B ダ」¹は、(14)のように規定されてい

¹ 倒置指定文「A ハ B ダ」は、意味を変えずに「B ガ A ダ」によって言い替えることができる。これを、西山(2003)では「指定文」と呼んでいる。本論文では、コピュラ文「A ハ B ダ」を考察

る。

- (14) 倒置指定文の名詞句 A は変項名詞句であり、A という 1 項述語を満足する値をさがし、それを B によって指定(specify)する。

(西山 2003: 135 (66))

(15) 変項名詞句

変項 x を含み、x を埋める値を求める

倒置指定文の典型的な例として、西山(2003)では以下の例文が挙げられている。

- (16) 花子殺しの犯人はあの男だ。 (西山 2003: 132 (60a))

- (17) 太郎について気になる点は、彼の話し方だ。 (西山 2003: 132 (60c))

- (18) 幹事は、あそこに立っているひとだ。 (西山 2003: 132 (60e))

- (19) 花子の仕事はその会議の通訳だ。 (西山 2003: 132 (60f))

倒置指定文の主語名詞句 A は、非指示的な「変項名詞句」とであるとされている。(16)の名詞句 A 「花子殺しの犯人」は、[x が花子殺しの犯人だ]という命題関数を表しており、名詞句 B 「あの男」が命題関数の変項 x を埋める値となっているのである。また、変更名詞句は、意味的には「項(argument)の位置にある値を問う Wh-疑問文」とであるとされ、よって倒置指定文の文全体では、「項(argument)の位置にある値を問う Wh-疑問文の意味を表す」という意味になる。(14)において「A という一項述語」という説明がなされているのは、このような理由からである。倒置指定文の名詞句 A が変項名詞句であるということは、言い換えると、倒置指定文は、疑問文「{誰が/何が}~であるか」とそれに対する答えを単一文の中で表現している文であるといえる。(16)~(19)の表す意味は、(20)~(23)が表す意味と等しい。

- (20) 誰が花子殺しの犯人か、それは、あの男だ。

対象としているため、「指定文」に関する考察は行わない。

- (21) 何が太郎について気になる点か、それは、彼の話し方だ。

- (22) 誰が幹事か、それは、あそこに立っているひとだ。

- (23) 何が花子の仕事か、それは、その会議の通訳だ。

倒置指定文の名詞句 A は非指示的な変項名詞句とされているが、名詞句 B に関しては明確な定義はなされていない。

西山(2003)の規定によると、(24)は「何がこの種の実験で一番大切なことか、それは、実験室の温度だ」と読むことが出来るので倒置指定文であり、名詞句 A 「この種の実験で一番大切なこと」は変項名詞句である。

- (24) この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ。

(西山 2003: 139 (77))

この場合、名詞句 B 「その実験室の温度」は特定の温度を指す表現ではなく、「変項名詞句」とであるとされている。しかし、「この種の実験で一番大切なこと」と「その実験室の温度」が共に「変項名詞句」であり同じ意味特性をもつということに、筆者は疑問を感じる。「その実験室の温度」が変項名詞句ならば、述語の位置に生起しないはずである。なぜならば、変項名詞句は、意味的に「項の位置にある値を問う Wh-疑問文」であるため、必ず項を埋める値よりも前に生起するからだ。よって、(25)の問題点が挙げられる。

- (25) 「変項名詞句」の概念が、明示的に定められていない。

(25)は、第 3 章で導入する linguistic SR により解決することができる。

また、西山(2003)は、「その実験室の温度」が変項名詞句であることの根拠として、(26c)のように「その実験室の温度=17 度」という言い替えが出来ないことを挙げているが、その理由に関しても、SR を用いて説明することができる。

- (26) a. この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ。

- b. その実験室の温度=17 度

c. ?この種の実験で一番大切なことは、17 度だ。

2.3. 所在コピュラ文

西山(2003)において、所在コピュラ文は一種のウナギ文であり、措定文であるとされている。

(27) お母さんは、台所だ。 (西山 2003: 397 (14))

(28) 洋子の鞆は、車の中だ。 (西山 2003: 397 (15))

西山(2003)によれば、(29a)は、(29b)の読みを持つウナギ文である。ウナギ文(29a)は、(30)のように、それに対応する「B の A」という表現ができる。そして、(30)の表現に対する自然な解釈は、(31)ではなく語用論的に下線部を補充した(32)のようなものとなっていると指摘している。

(29) a. その車は 2000cc だ。 (西山 2003: 397 (18a))

b. その車は、排気量は 2000cc だ。 (西山 2003: 397 (18b))

(30) 2000cc の車 (西山 2003: 397 (21a))

(31) ?2000cc デアル車 (西山 2003: 398 (22a))

(32) a. 排気量が 2000cc デアル車 (西山 2003: 398 (23a))

(27)(28)が、(30)のような表現ができ、かつ(32)のような解釈がなされるならば、ウナギ文と同様の語用論的解釈が行われていると考えられる。(33)(34)(32)より、この予測が正しいことがわかる。

(33) a. 台所のお母さん (西山 2003: 398 (24a))

b. [車のなか]の[洋子のカバン] (西山 2003: 398 (24b))

(34) a. ?台所デアルお母さん (西山 2003: 398 (25a))

b. ?[車のなか]デアル[洋子のカバン] (西山 2003: 398 (25b))

(35) a. 居場所が台所デアルお母さん (西山 2003: 398 (26a))

b. 置場所が[車のなか]デアル[洋子のカバン] (西山 2003: 398 (26b))

以上のことから、所在コピュラ文(27)(28)は、(35a)(35b)の下線部を語用論的に補充して解釈を行っているとし、西山(2003)は、所在コピュラ文は、ウナギ文が措定文の変種であるのと同様に、措定文の変種である、と述べているにとどまっている。よって、(36)が問題点として挙げられる。

(36) 西山(2003)の所在コピュラ文に関する考察は、措定文との違いが語用論的な観点からしか説明されておらず、生起する名詞句の意味特性についても考察が与えられていない。

(36)は、第 4.4 章のダケ/シカ文の容認性の可否をもとに示すことができる。

2.4. 倒置同定文

西山(2003)は、倒置同定文(identificational sentence)「A ハ B ダ」²の名詞句 A,B の意味特性についてのように規定している。

(37) 倒置同定文の名詞句 A,B は、ともに指示的名詞句である。且つ、名詞句 B は、名詞句 A を同定するための特徴記述を満たすものである。

倒置同定文の例として、以下の例文を挙げている。

(38) 本書は、涙なしにドイツ語をマスターできるものです。 (西山 2003: 168 (140a))

(39) あの男は、社長の片腕として信任の厚いひとだ。 (西山 2003: 168 (140c))

² 倒置同定文「A ハ B ダ」は、意味を変えずに「B ガ A ダ」によって言い替えることができる。これを、西山(2003)では「同定文」と呼んでいる。本論文では、コピュラ文「A ハ B ダ」を考察対象としているため、「同定文」に関する考察は行わない。

(40) こいつは山田村長の次男だ。 (西山 2003: 168 (140e))

(41) あの人は、私の息子のヴァイオリンの先生だ。
(西山 2003: 171 (154b)より作例)

(42) 目の前の人は、自分の夫である。 (西山 2003: 172 (157))

西山(2003)は、倒置同定文の解釈に際して注意すべき点として、名詞句 B の意味上の特性について述べている。名詞句 B は、A を同定するための特徴記述を満たすものを指示するものであり、同一対象を指示する別の表現で置き換えることのできない特殊な指示表現であるとしている。しかし、(38)(39)(40)は、名詞句 B が名詞句 A の属性を表している「措定文」であるとも解釈できる。その点に関して、西山(2003)は、倒置同定文「A ハ B ダ」は「A は何者か」という、A を他から識別する情報を与えているのに対し、措定文「A ハ B ダ」は「A はどんなひと(もの)か」という属性に関する情報を与えている点に大きな違いがある、と説明している。また、熊本(1995)は、倒置同定文の規定として(43)を挙げており、これは西山(2003)の主張と一致する。

(43) 「A」は「B」という特徴記述を満たす「もの」であるということによって、
「A」の指示対象を他から識別して認定する。 (西山 2003: 172 (155b))

次の(44)(45)は、A を他から識別する情報を与えているともいえる。しかし、これらの例文は、西山(2003)では、「措定文」であるとされている。

(44) 父は、この会社の社長だ。 (西山 2003: 125 (14))

(45) 小泉純一郎は、日本の総理大臣だ。 (西山 2003: 125 (14))

西山(2003)がいうところの「A を他から識別する情報」になりえるか否かは、その情報が発せられる状況によるところが大きく、文や語の中に内在する特性ではないと、筆者は考える。以上のことから、西山(2003)における倒置同定文に対する規定は曖昧で、措定文との明確な違いが示されているとはいえない。よって、(46)の問題点が挙げられる。

(46) 倒置同定文を措定文とは異なる意味を表すコピュラ文として分類を行っているにもかかわらず、その十分な根拠が示されていない。

(46)は、第 4.1 章のダケ/シカ文の容認性の可否をもとに、倒置同定文と措定文に意味的な違いが存在しないことを示す。

3. linguistic SR の導入

第2章で論じたように、西山(2003)における名詞句の定義には、曖昧な箇所や、異なる意味特性を正確に分類できていない箇所が存在する。ゆえに、その名詞句の定義に基づいて行ったコンピュータ文の分類もまた、その意味構造について一貫した説明がなされているとは言い難い。

そこで本論文では、上山(2011, 印刷中)より linguistic SR を導入する。linguistic SR とは、LF(意味表示)を Object Information と比較対象可能な式に変換したものである。また、LFにおける各語彙項目が変換された一つ一つの式を SR 式と呼ぶ。すべての語彙は、四種類の SR 式のいずれかによってその意味が表されるため、各語彙の意味特性を理解する上での曖昧性が解消される。よって、コンピュータ文の分類においても、各コンピュータ文の意味構造上の違いを明確に理解することが可能となる。第3章では、Object Information と linguistic SR に関する説明を行い、四種類の SR 式の意味特性について、西山(2003)における「指示的名詞句」「非指示的名詞句」「叙述名詞句」「変項名詞句」といった名詞句の分類との比較を交えながら解説する。

3.1. Object Information

私達の脳内には、具体的なモノ/コト(オブジェクト)が、その性質とともに記憶されていると考えられる。以下では、一つ一つのオブジェクトは指標番号付きの「X」(モノ: individual) または「E」(コト: eventuality) で表し、同じオブジェクトであると認識していれば同じ指標番号を、異なるオブジェクトであると認識していれば異なる指標番号を持っていると想定する。各エントリーの形式は(47)(48)のようになっており、オブジェクトが持つ属性(attribute)とその値(value)が記憶されている。具体的なオブジェクトを例にとり示したものが(49)(50)である。

(47) $X_n : \text{attribute}_1 = \text{value}_1, \text{attribute}_2 = \text{value}_2, \text{attribute}_3 = \text{value}_3, \dots$

(48) $E_n : \text{attribute}_1 = \text{value}_1, \text{attribute}_2 = \text{value}_2, \text{attribute}_3 = \text{value}_3, \dots$

(49) a. X_{13} : 名称=山本武, 職業=教師, 性別=男性, 年齢=25, 婚姻状況=未婚,
b. X_{38} : 名称=点と線, 類=小説, 著者=松本清張, 主人公=鳥飼重太郎, ...

(50) a. E_{84} : 名称=OL 殺人事件, 犯人=田中次郎, 被害者=鈴木明美, ...
b. E_{84} : 類=落とした, 行為者=John, 落下物=, ...

他者とのコミュニケーションとは、互いの Object Information から情報を引き出し、それを相手に伝えたり、相手からの情報を受け取ることに他ならない。その過程で、我々の持つ Object Information の内容は、修正や更新がなされる。言語が Object Information の修正や更新に役立っているということは、言語と Object Information を比較対照可能な式に変換することができるということである。

語彙項目の情報は Lexicon において指定されているが、その語彙が文構造のどの位置を占めるかにより、表される意味は変化する。(51)では「あなたの名前」という同じ名詞句が用いられているが、その意味は同じではない。(51a)では「あなたの名前」は「鈴木明美」のことであり、(51b)ではそうではなく、「あなたの名前」は、「あなたの名前が何であるか」と意味を表している。

(51) あなたの名前を書いてください。
= 欄に「鈴木明美」と書く

(52) あなたの名前は知りません。
≠ 「鈴木明美」は知らない

このように、lexicon によって指定されている語彙項目の情報は文構造の中で変容を受ける。語彙はあらゆる文において、固定された不変の「意味」を表すのではない。語彙の「意味」は構造によってもたらされるものであるといえる。

個々の語彙項目とその間に成立している構造関係の総体である LF 表示を、Object Information と比較対照可能な式として変換したものを linguistic SR とよび、各語彙項目が変換された一つ一つの式を SR 式と呼ぶ。

3.2. 修飾関係を表す表記方法

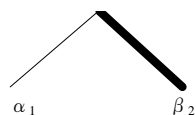
各 SR 式の説明を行う前に、語彙の修飾関係を表す表記方法についての説明を行う。

(53)(54)のような二つの語彙からなる名詞句は、(55)のような構造の構築物である。日本語では右側を主要部とし、その主要部の素性を持つ。

(53) 黄色い₁花₂

(54) 春₁の日差し₂

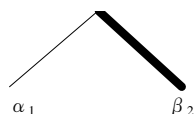
(55)



このように α_1 と β_2 が修飾関係にある場合、linguistic SR では、次のように表記する。

(56) 修飾関係がもたらす linguistic SR

a.



b. a. の linguistic SR

\bigcirc_1 : ...

\bigcirc_2 : ... | \bigcirc_1

(56)の説明に則って(53)(54)の linguistic SR を表記すると、以下のようになる。

(53) a. 黄色い₁花₂

b. p_1 : 色() = 黄色い

x_2 : 類 = 花 | p_1

(54) a. 春₁の日差し₂

b. p_1 : 季節() = 春

e_2 : 類 = 日差し | p_1

本論文では、二つの要素の修飾関係を表す場合、このような表記方法を用いて linguistic SR を表記する。

3.3. 各 SR 式の説明

SR 式は、「 x_n 型」「 e_n 型」「 v_n 型」「 p_n 型」の四種類である。以下、各 SR 式の表す意味について解説する。

3.3.1. x_n 型

x_n 型の SR 式は、Object Information における value に相当する表現であり、モノ (individual) との同定 (identification) が可能である。

x_n は「モノとの同定が可能である」と述べたが、これは「常にモノとの同定が行われる」という意味ではない。例えば、(8)における「医者」は特定のある人物との同定が行われているとは考えにくい。が、(57)のような文脈においては、特定の人物との同定が行われていると解釈できる。 x_n が実際にモノとの同定が行われるか否かは文脈情報、或いは言葉と話者のデータベースの照合により決定される

(8) a. 医者は金持ちだ。

b. 医者₁は金持ち₂だ。

c. x_1 : 類 = 医者

p_2 : 貧富の度合い() = 金持ち

(57) (同姓同名の医者とフリーターがいて)

フリーターはかなり赤貧らしいけど、医者は金持ちだ。

x_n 型の attribute は「名称」または「類」になることが多いが、(58)(77)のように他の attribute であっても、モノとの同定可能な語彙は x_n である。

(58) a. その四人は九大生だ。

b. その四人₁は九大生₂だ。

c. x_1 : 人数 = 四人

p_2 : 類() = 九大生

(59) a. あの女が佐藤の恋人だ。

b. あの女₁が佐藤₂の恋人₃だ。

c. x_1 : 性別 = 女

x_2 : 名称 = 佐藤

v_3 : 恋人() | x_2

「これ」「それ」「彼」「彼女」等の直示的 (deictic) な代名詞がモノとの同定が可能であることは言うまでもない。よって、これらは x_n となる。

(60) a. 彼が飲み会の幹事だ。

- b. 彼₁が飲み会₂の幹事₃だ。
 c. x₁: 類=彼
 e₂: 類=飲み会
 v₃: 幹事() | e₂

- (61) a. それは私の傘だ。
 b. それ₁は私₂の傘₃だ。
 c. x₁: 類=それ
 x₂: 類=私
 v₃: 傘() | x₂

- (62) a. これはおいしい。
 b. これ₁はおいしい₂。
 c. x₁: 類=これ
 p₂: おいしさ()=おいしい

3.3.2. e_n型

e_n型のSR式は、Object Informationにおけるvalueに相当する表現であり、コト(eventuality)との同定が可能である。

e_n型は、オブジェクトとの同定が可能であるという点で、基本的にはx_n型と同じである。

(64)(65)(66)(67)における下線部の語はe_n型である。

- (63) この事件は未解決だ。
 (64) 今年、東日本大震災が起こった。
 (65) その飛行機の墜落により、多くの死亡者が発生した。
 (66) 由美はそのパソコンを壊した。
 (67) そのパソコンは壊れた。

ただし、(66)の「壊した」と(67)の「壊れた」を比較するとわかるように、「類」としては似たような「こと」でありながら、どのような参加者が関わっているかという認識が異なる。

る。ある語がどのような参加者を持つかという指定は、その語の項構造(argument structure)³と呼ばれる。例えば、「壊した」「壊れた」のSR式は(68)のようになると考えられる。

- (68) a. e₁: 類=壊した, Theme = __
 b. e₂: 類=壊れた, Theme = __, Agent __

(68)の状態では、空欄が補填されていないため語の解釈が十分になされないが、この値がInformation Database内の知識と同定できれば、解釈が可能になる。全てのe_n型が項構造を持っているわけではなく、「大地震」「墜落」のように項構造を持たないものもある。項構造を持たないe_n型のSR式は(69)の通りである。

- (69) a. e₁: 名称=東日本大震災
 b. e₂: 類=墜落

3.3.3. v_n型

v_n型のSR式は、Object Informationにおけるattributeに相当する表現であり、オブジェクトとの同定は行われない。

v_n型は、(70)(71)の□で囲んでいる部分によって表される。

- (70) X₄₀: 類=不審者, 性別=男性, 年齢=25, 服装=黒いジャンパー, 体格=中肉中背, …
 (71) E₃₉: 名称=OL殺人事件, 犯人=__, 被害者=鈴木明美, 殺害現場=福岡市東区のマンション…

殺人事件が発生し、犯人はまだ特定されていないが、殺害現場にて不審な人物の目撃情報があったとする。(72)は、目撃証言を受けた警察の発言、(73)は被害者の家族の発言である。

- (72) 黒いジャンパーの男を探して下さい。

³ 本論文では、コンピュータ文に生起する名詞句の意味役割について論じるため、(68)のように項構造を持つ語は考察対象に入らない。

(73) 犯人を探して下さい。

(72)の「黒いジャンパーの男」は、(70)における attribute(性別, 服装)の value に相当する表現である。それに対し、(71)の「犯人」は(50)における attribute に相当する表現である。「犯人」は「ある事件(オブジェクト)の犯人(attribute)に該当する人物」という意味を表す。「黒いジャンパーの男」が、モノとの同定が可能な表現であるのに対し、「犯人」は、その事件の犯人であるところの人物という意味で、特定のオブジェクトとの同定はなされない。次の例文の下線部は v_n 型の語である。 v_n 型の SR 式は「 v_n : ○○()」という形式で表記されるが、解釈される際、括弧の中にはその attribute が関与するオブジェクトが補填される。それぞれ関与するオブジェクトは、(74)の「幹事」は「忘年会」、(51)の「名前」は「あなた」、(75)の「性格」は「彼女」となる。

- (74) a. 忘年会の幹事は田中さんだ。
b. 忘年会₁の幹事₂は田中さん₃だ。
c. x_1 : 類=忘年会
 v_2 : 幹事() | x_1
 x_3 : 名称=田中さん

- (51) a. あなたの名前を書いてください。
b. あなた₁の名前₂を書いて₃。
c. x_1 : 類=あなた
 v_2 : 名前() | x_1
 e_3 : 類=書いて, Theme=__, Agent=__, | v_2

- (75) a. 彼女は、綺麗だが性格は冷たい。
b. 彼女は、綺麗だが性格は冷たい。
c. x_1 : 類=彼女
 p_2 : 容姿()=綺麗だ
 v_3 : 性格() | x_1
 p_4 : 性格()=冷たい

しかし、「犯人」という語は常に v_n 型として表れるのかというと、そうではない。(76)の「犯人」が、ある Object Information における attribute であり「この男」が「犯人」の value になっているのに対し、(77)は「犯人は男性という属性を有している」という意味になり、「犯人」は特定の人物との同定が可能な語として生起している。(76)のように「犯人」が

v_n として生起する場合と、(77)のように「犯人」が x_n として生起する場合とは、参照している Object Information が異なると考えられる。

- (76) a. 犯人はこの男だ。
b. 犯人₁はこの男₂だ。
c. v_1 : 犯人()
 x_2 : 類=男
d. E_{84} : 名称=OL 殺人事件, 犯人=(この)男, 被害者=鈴木明美, …
- (77) a. 犯人は男性だ。
b. 犯人₁は男性₂だ。
c. x_1 : 類=犯人
 p_2 : 性別()=男性
d. X_{28} : 名称=中田和夫, 類=犯人, 性別=男性, 年齢=42, 前職=建設作業員, …

以下の倒置指定文(78)(79)の A の位置には v_n 型の名詞句が生起し、B の位置には v_n が示す attribute の value を表す名詞句が生起する。これは、西山(2003)における「変項名詞句」とその「変項を埋める値」という考え方に一致する。(2.2 章参照)

- (78) a. 花子殺しの犯人はあの男だ。
b. 花子殺し₁の犯人₂はあの男₃だ。
c. e_1 : 名称=花子殺し
 v_2 : 犯人() | e_1
 x_3 : 類=男 (西山 2003: 132 (60a))
- (79) a. 花子の仕事はその会議の通訳だ。
b. 花子₁の仕事₂はその会議₃の通訳₄だ。
c. x_1 : 名称=花子
 v_2 : 仕事()= | x_1
 p_3 : 類()=その会議
 e_4 : 仕事=通訳 | p_3 (西山 2003: 132 (60f))

3.3.4. p_n型

p_n型は、attribute に相当する表現である場合と、value に相当する表現である場合とがある。いずれの場合も「あるオブジェクトの attribute がそのような value であること」を意味し、オブジェクトとの同定は行われぬ。本論文では、便宜上、前者の p_n型を「p_n型(attribute)」、後者の p_n型を「p_n型(value)」と表記する。

(80)(81)(82)における下線部の語は、p_n型(value)である。p_n型(value)が表す内容は、度合いが関わる(gradable)ものとなることもある。この場合、p_n型(value)が表すのは、いわゆる形容詞や形容動詞が表す内容に等しい。(81)の「綺麗だ」「優しい」や(82)の「難しい」がそれにあたる。

- (80) a. 佐々木さんは26歳だ。
 b. 佐々木さん₁は26歳₂だ。
 c. x₁: 名称=佐々木さん
 p₂: 年齢()=26歳

- (81) a. 彼女は、綺麗で優しい。
 b. 彼女₁は、綺麗で₂優しい₃。
 c. x₁: 類=彼女
 p₂: 容姿()=綺麗だ
 p₃: 性格()=優しい

- (82) a. この参考書は難しい。
 b. この参考書₁は難しい₂。
 c. x₁: 類=参考書
 p₂: 難易度()=難しい

(83)の名詞句 B は p_n型(value)であり、「あのひと(オブジェクト)の名前(attribute)は田中太郎(value)だ」という意味を表す。このように、固有名詞も p_n型として表れることがある。

- (83) a. あのひとは田中太郎だ。
 b. あのひと₁は田中太郎₂だ。
 c. x₁: 類=ひと
 p₂: 名称()=田中太郎 (西山 2003: 126 (22))

以下の(51)は p_n型(attribute)が生起する例である。p_n型(attribute)は、一見 v_n型と似ているた

め混同されやすい。

- (51) あなたの名前を書いてください。
 =欄に「鈴木明美」と書く
 (52) あなたの名前は知りません。
 ≠「鈴木明美」は知らない

(51)における「あなたの名前」は「オブジェクト(あなた)の attribute(名前)に該当するもの」という意味であるのに対し、(52)における「あなたの名前」は「オブジェクトの attribute がどのような value を持つか」という意味である。(51)の「名前は」v_n型であるが、(52)の方は p_n型(attribute)である。

(84)(85)も同様に、名詞句 B として p_n型(attribute)が生起する例である。(84)は「彼女の秘密は、本当の年齢が何歳であるかということだ」という意味であり、(85)は「事件の鍵は、本当の殺害現場がどこなのかということだ」という意味である。

- (84) a. 彼女の秘密は、年齢だ。
 b. 彼女₁の秘密₂は、年齢₃だ。
 c. x₁: 類=彼女
 v₂: 秘密() | x₁
 p₃: 年齢()=—
 (85) a. 事件の鍵は、本当の殺害現場だ。
 b. 事件₁の鍵₂は、本当の₃殺害現場₄だ。
 c. e₁: 類=事件
 v₂: 鍵() | e₁
 p₃: 真偽()=本当の
 p₄: 殺害現場()=— | p₃

通常、サ変動詞の語幹である「攻撃」「走行」「発言」等は「コト」を指すため e_nとして生起するが、「当選」「賛成」「発売」等、サ変動詞でありかつ瞬間動詞の語幹である語が、コンピュータ文の名詞句 B の位置に生起するとき、p_nとなることもある。瞬間動詞の語幹が述語となった場合、人やモノの性質や属性を表す、形容詞や形容動詞に似た働きをするからであると考えられる。

- (86) a. 松本氏が五期連続で当選だ。
 b. 松本氏₁が五期連続₂で当選₃だ。
 c. x₁: 名称=松本氏
 p₂: 結果()=五期連続
 p₃: 当落()=当選
- (87) a. 私は賛成だ。
 b. 私₁は賛成₂だ。
 c. x₁: 類=私
 p₂: 賛否()=賛成
- (88) a. このDVDは今日発売だ。
 b. このDVD₁は今日₂発売₃だ。
 c. x₁: 類=DVD
 p₂: 日程()=今日
 p₃: 販売状況()=発売

3.4. 西山(2003)の名詞句の定義との比較

第2章で指摘した、西山(2003)の名詞句の定義における問題点が、SR式を用いることでどのように解消されるかについて論じていく。

西山(2003)による指示的名詞句の定義にしたがうと、(6)(7)に生起する名詞句Aのように、特定の対象を指示するとはいえない場合を例外として認める必要があったが、SR式にあてはめると、これらはすべてx_n型となる。よって、(10)で挙げた問題点は解決する。

- (6) a. 鯨は哺乳類だ。
 b. 鯨₁は哺乳類₂だ。
 c. x₁: 類=鯨
 p₂: 生物の分類()=哺乳類
- (7) a. 学生は怠け者だ。
 b. 学生₁は怠け者₂だ。
 c. x₁: 類=学生
 p₂: 勤勉さ()=怠け者

西山(2003)では、指定位の名詞句Bの位置に、「叙述名詞句」以外の形容詞・形容動詞が生起する場合がある、と述べていたが、これらをSR式にあてはめるとp_n型(value)となる。よって、(13)で挙げた問題点は解決する。以下の(5)(8)(11)(12)の名詞句Bはすべてp_n型(value)である。

- (89) a. この犬は賢い。
 b. この犬₁は賢い₂。
 c. x₁: 類=犬
 p₂: 頭の良さ()=賢い
- (90) a. 洋子は元気だ。
 b. 洋子₁は元気だ₂。
 c. x₁: 名称=洋子
 p₂: 健康状態()=元気だ

西山(2003)では、倒置指定文である(24)の名詞句Bは名詞句Aと同様に「変更名詞句」であるとしていた。

- (24) a. この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ。
 b. この種₁の実験₂で一番大切な₃こと₄は、その実験室₅の温度だ₆。
 c. p₁: 種類()=この種の
 e₂: 類=実験 | p₁
 p₃: 重要性()=一番大切な
 v₄: こと() | e₂, p₃
 x₅: 類=実験室
 p₆: 温度()= | x₅

しかし、名詞句Aが「オブジェクト(この種の実験)のattribute(一番大切なこと)に該当すること」という意味を表すv_n型であるのに対し、名詞句Bは「オブジェクト(実験室)のattribute(温度)がどのようなvalueを持つか」という意味を表すp_n型(attribute)である。西山(2003)は名詞句Aと名詞句Bを同じ「変項名詞句」であるとしていたが、linguistic SRに基づくこれらの意味特性の違いを明示的に示すことができる。西山(2003)は、名詞句B「その実験室の温度」が「変項名詞句」であることの理由として、(26c)のように具体的な数値への置き換えができないことを挙げていたが、linguistic SRの観点から考えた場合も、p_n型(attribute)はv_n型と同様にオブジェクトとの同定は行われないため、特定の数値による言

い替えはできないのである。

以上で述べたように、linguistic SR という観点から語彙の意味特性を捉えることで、西山(2003)の名詞句の定義における問題点が解決できる。

4. コピュラ文の分類におけるとりたて詞ダケ／シカの役割

西山(2003)は、コピュラ文「AハBダ」の分類を行う際、「A, Bが指示的か非指示的か」という基準を設けていた。しかし、ここまで述べてきたように、西山(2003)が提案する「指示的／非指示的」という概念に基づいた名詞句の定義を用いると、考察を行う上で曖昧性が生じるケースが多く存在する。そこで本論文では、linguistic SRに基づき、「A, Bがオブジェクトとの同定が可能か否か」という基準に基づき、コピュラ文「AハBダ」の分類を行う。

本論文では、コピュラ文「AハBダ」の分類を行うための手段として、とりたて詞ダケ／シカを用いる。とりたて詞ダケ／シカが、A, Bの意味特性を判断する手段として有効である理由を、以下の章で論じていく。

4.1. とりたて詞ダケ／シカの意味機能

本論文では、コピュラ文の分類を行う手段としてダケ／シカを用いる理由は、ダケ／シカの持つとりたて詞としての機能にある。

沼田(2006)では、とりたて詞ダケは「限定」の意味を表すとし、ダケの意味機能を(91)のように示している。

(91) ダケの意味機能

主張：断定・自者—肯定

含み：断定・他者—否定

(沼田 2006: 196 (12))

沼田(2006)は、とりたて詞がとりたてる要素を「自者」、それに対比される「自者」以外の要素を「他者」と呼んでいる。そして、「自者」について明示される内容を「主張」、「他者」について暗示される内容を「含み」と呼び、「主張」と「含み」の論理的関係を表すのがとりたて詞の意味機能であるとしている。(92)における「太郎」が「自者」となり、「太郎が来た」が「主張」、「太郎以外は来なかった」が「含み」となる。

(92) 太郎_(自) だけが来た。

(沼田 2006: 217 (17a))

沼田(2006)では、シカの意味機能は(93)のように示されている。

(93) シカの意味機能

主張：断定—自者・否定

含み：断定—他者・肯定

(沼田 2006: 213 (11))

(94)は、シカが生起する例である。ダケと同様に「自者」は「太郎」となる。しかし、「主張」は「太郎が来なかった」ではない。シカは必ず否定表現をとまうため、「太郎が来なかった」を「否定」した「太郎が来なかったのではない」が「主張」となり、「太郎以外は来なかった」が「含み」となる。

(94) 太郎_(自)しか来なかった。(沼田 2006: 217 (17b))

シカの意味機能は、ダケとは「主張」と「含み」における「自者／他者」の「肯定／否定」が逆転するが、シカは上記で示したように、常に否定述語と共起する。述語との関係からみると、否定述語に対する自者—否定は、肯定述語に対する自者—肯定と同じであり、否定述語に対する他者—否定は、肯定述語に他する他者—肯定と同じである。よって、シカはダケと同じ意味を表すこととなるため、シカも「限定」の意味を表すと述べられている。このように、ダケとシカは、否定表現を伴わない／伴うという違いがあるが、ともに「限定」という同じ意味機能を持つとりたて詞であるといえる⁴。ここで、コンピュータ文「AハBダ」の、AとBをそれぞれダケとシカでとりたてると、(95)(96)のようになる。ダケとシカは同じ意味機能を持つため、(95a)と(95b)、(96a)と(96b)は、それぞれ同じ意味を表す。

- (95) a. Aダケ(ガ)Bダ。
b. AシカB～ナイ。

⁴ 沼田(2006)では、シカは「含み」の「他者—肯定」に話し手の主眼があると述べている。(i)のように、「他者」が「来ない」ことが原因で困ったことが起こる状況では、ダケが生起する文は容認性が下がり、シカが生起する文は自然な文となる。

- (i) a. ?太郎だけが来たので、ゲームをするには人数が足りなかった。
b. 太郎しか来なかったので、ゲームをするには人数が足りなかった。
(沼田 2006: 217 (18))

それに対し、(ii)のように「他者」の存在の有無が状況に影響を与えない場合は、シカが生起する文の容認性が下がる。

- (ii) a. カードの度数が一回分だけ残っていたから、電話がかけられた。
b. *カードの度数が一回分しか残っていなかったから、電話がかけられた。
(沼田 2006: 217 (20))

このことから、シカの視点は形式的には「自者」におかれているが、真の視点は「他者」におかれていると述べられている。よって、厳密にはダケとシカの表す意味は微妙に異なる点があるのだが、本論文では、語彙の意味特性を判別する手段としてとりたて詞を用いているのであり、そのことにこれらの微細な意味の違いは影響しないといえる。

- (96) a. Bダケ(ガ)ダ。
b. BシカA～ナイ。

また、とりたて詞がとりたてる要素である「自者」は、「他者」と共にその存在が認識されていなければならないため、「自者」はオブジェクトと同定可能な語彙であると考えられる。よって、「自者」としてとりたて詞と共起できる語彙は、オブジェクトと同定可能な語彙であるという判断ができる。コンピュータ文「AハBダ」のA,Bそれぞれに対し、オブジェクトと同定可能か否かを判断するためには、A,Bそれぞれが「自者」として生起できるか否かを調べればよい。つまり、(95a)と(96a)、(95b)と(96b)、(95a)と(96b)のいずれかの組み合わせを用いて、その容認性を検証すればよいということになる。この三つの組み合わせのうちどれを用いるかという問題だが、筆者は(95a)と(96b)の組み合わせ(以下の(97))を採用した。

- (97) a. Aダケ(ガ)ダ。
b. BシカA～ナイ。

(97)を採用した理由は、(97b)「BシカA～ナイ」と所在文との関係に起因する。この理由について、第4.2章で詳しく説明を行う。

4.2. とりたて詞シカと所在文

コンピュータ文の分類を行う方法として、(97b)を採用した理由として、シカが「所在」を表す意味機能をもっているということが挙げられる。

西山(1994)金水(2006)では、「AハBニ{イル／アル}」という形式で、存在動詞が生起する文を「所在文」と呼んでいる。また、所在文は、コンピュータ文「AハBダ」に言い替えることができる。所在文の名詞句Bをとりたて詞シカによってとりたてると、「BシカAハ{ナイ／イナイ}」という語順により表現できる。(98)(99)の所在文の名詞句Bを、とりたて詞シカを用いてとりたてたのが、(98)(99)である。

- (98) a. そのブランドは、岩田屋にある。
b. 岩田屋しか、そのブランドはない。

- (99) a. 合格者は、体育館にいる。
b. 体育館しか、合格者はいない。

つまり、「BシカAハ{ナイ／イナイ}」の容認性を調べることで、コンピュータ文「AハB

ダ」が所在の意味を表すか否かの判断ができる。このことが、(97b)をコピュラ文の判断基準として採用したことの理由である。

また、金水(2006)では、「空間的存在文には二項存在動詞が用いられる」と述べられており、空間的存在文の一種である所在文「AハBニ{イル/アル}」の存在動詞「イル」「アル」は、二項動詞であるとされている。このことは、所在文に生起する名詞句A,Bは二項動詞の項なのであり、それぞれが異なるオブジェクトとの同定が可能であるということの意味する。よって、所在を表すコピュラ文の名詞句A,Bも同様に、異なるオブジェクトとの同定が可能な語彙であると考えられる。

5. ダケ/シカ文によるコピュラ文の分類

コピュラ文「AハBダ」に対して、ダケ/シカ文「AダケBダ」「BシカA~ナイ」の容認性の可否を検証した結果、分類1,2,3の三種類のパターンが存在するという結果が得られた。(100)に示した三種類の例文を用いて、以下の章にて検証結果を示していく。

- (100) 例文 a. : Aダケ(ガ)Bダ。
例文 b. : BシカA~ナイ。
例文 c. : AハBダ。

5.1. 分類1

分類1の名詞句Aは、 x_n 型または e_n 型となり、例外を除き基本的にオブジェクトとの同定が可能である。名詞句Bは $p_n(\text{value})$ 型または v_n 型となり⁵、オブジェクトとの同定が行われない。

- (6) a. 鯨だけ哺乳類だ。
b. *哺乳類しか鯨ではない。
c. 鯨は哺乳類だ。
d. 鯨₁は哺乳類₂だ。
e. x_1 : 名称=鯨
 p_2 : 生物の分類() =哺乳類
- (44) a. 田村さんだけ(が)今日の発表者だ。
b. *今日の発表者しか田村さんではない。
c. 田村さんは今日の発表者だ。
d. 田村さん₁は今日₂の発表者₃だ。
e. x_1 : 類=田村さん
 e_2 : 日時=今日
 v_3 : 発表者() | x_2

以下の(5)(8)(12)(44)(45)は、西山(2003)において「措定文」に分類されるコピュラ文である。

⁵ 名詞句Bが v_n 型となる場合は、とりたてて詞ダケの後ろに格助詞ガを加えると、より自然な文になる。

- (5) a. モーツァルトだけ天才だ。
b. *天才しかモーツァルトではない。
c. モーツァルトは天才だ。

- (8) a. 医者だけ金持ちだ。
b. *金持ちしか医者ではない。
c. 医者は金持ちだ。

- (12) a. 洋子だけ元気だ。
b. *元気しか洋子ではない。
c. 洋子は元気だ。

- (44) a. 父だけ(が)この会社の社長だ。
b. *この会社の社長しか父ではない。
c. 父はこの会社の社長だ。

- (45) a. 小泉純一郎だけ(が)日本の総理大臣だ。
b. *日本の総理大臣しか小泉純一郎ではない。
c. 小泉純一郎は日本の総理大臣だ。

(101)は、西山(2003)において、「措定文」と「倒置同定文」の両方の解釈があるとされる例文である。名詞句の SR 式は、名詞句 A は x_n 型、名詞句 B は p_n 型である。

- (101) a. あのひとだけ田中太郎だ。
b. *田中太郎しかあのひとではない。
c. あのひとは田中太郎だ。

(102)(103)(104)は、名詞句 B が瞬間動詞の語幹となっている場合の例文である。第 3.3.4 章でも述べたように、このような場合、名詞句 B は p_n 型となる。

- (102) a. 松本氏だけ(が)当選だ。
b. *当選しか松本氏ではない。
c. 松本氏は当選だ。

- (103) a. 佐野先輩だけ(が)出席だ。
b. *出席しか佐野先輩ではない。
c. 佐野先輩は出席だ。

- (104) a. 常任理事国だけ(が)賛成だ。
b. *賛成しか常任理事国ではない。
c. 常任理事国は賛成だ。

(63)(105)のように、名詞句 A の SR 式が e_n 型になる場合も、分類 1 に含まれる。

- (63) a. この事件だけ未解決だ。
b. c.*未解決しかこの事件ではない。
c. この事件は未解決だ。

- (105) a. 今日の天気だけ晴れだ。
b. *晴れしか今日の天気ではない。
c. 今日の天気は晴れだ。

以下の(38)(39)(40)(41)(42)は、西山(2003)において「倒置同定文」に分類されるコンピュータ文である。

- (38) a. 本書だけ(が)、涙なしにドイツ語をマスターできるものだ。
b. *涙なしにドイツ語をマスターできるものしか、本書ではない。
c. 本書は、涙なしにドイツ語をマスターできるものだ。

- (39) a. あの男だけ(が)、社長の片腕として信任の厚いひとだ。
b. *社長の片腕として信任の厚いひとしか、あの男はいない。
c. あの男は、社長の片腕として信任の厚いひとだ。

- (40) a. こいつだけ(が)山田村長の次男だ。
b. *山田村長の次男しかこいつではない。
c. こいつは山田村長の次男だ。

- (41) a. あの人のだけ(が)、私の息子のヴァイオリンの先生だ。
b. *私の息子のヴァイオリンの先生しか、あの人はない。

- c. あの人は、私の息子のヴァイオリンの先生だ。
- (42) a. 目の前の人だけ(が)自分の夫だ。
b. *自分の夫しか目の前の人ではない。
c. 目の前の人^は自分の夫だ。

(84)(85)は、名詞句 A が $p_n(\text{attribute})$ 型、名詞句 B が v_n 型である。 $p_n(\text{attribute})$ 型は指示性を持たない。よって、これらは例外となる。

- (84) a. 年齢だけ(が)、彼女の秘密だ。
b. *彼女の秘密しか、年齢ではない。
c. 年齢は、彼女の秘密だ。
- (85) a. 本当の殺害現場だけ(が)、事件の鍵だ。
b. *事件の鍵しか、本当の殺害現場ではない。
c. 本当の殺害現場^は、事件の鍵だ。

以上の検証結果から、分類 1 のコンピュータ文に生起する名詞句 A,B の SR 式について、(106) の一般化を行う。

(106) 分類 1 における名詞句 A,B の SR 式

$A[x_n/e_n] \wedge B[p_n(\text{value})/v_n]$ ダ

名詞句 A : オブジェクトとの同定が可能

名詞句 B : オブジェクトとの同定は行われない

ただし、以下の場合^は例外

$A[p_n(\text{attribute})] \wedge B[v_n]$ ダ

名詞句 A : オブジェクトとの同定は行われない

名詞句 B : オブジェクトとの同定は行われない

5.2. 分類 2

分類 2 の名詞句 A は、 v_n 型となり、オブジェクトとの同定が行われない。名詞句 B は、 x_n 型または e_n 型となり、例外を除き基本的にオブジェクトと同定が可能である。

- (107) a. *犯人だけ佐藤さんだ。

- b. 佐藤さんしか犯人ではない。
c. 犯人は佐藤さんだ。
d. 犯人₁は佐藤さん₂だ。
e. v_1 : 犯人 ()
 x_2 : 名称 = 佐藤さん

- (108) a. *松浦さんの担当だけ受付だ。
b. 受付しか松浦さんの担当ではない。
c. 松浦さんの担当は受付だ。
d. 松浦さんの担当₁は受付₂だ。
e. x_1 : 名称 = 松浦さん
 v_2 : 担当 ()
 e_3 : 仕事の種類 = 受付

以下の(13)(16)(17)(18)は、西山(2003)において「倒置同定文」に分類されるコンピュータ文である。

- (16) a. *花子殺しの犯人だけあの男だ。
b. あの男しか花子殺しの犯人ではない。
c. 花子殺しの犯人はあの男だ。
- (17) a. *太郎について気になる点だけ、彼の話し方だ。
b. ?彼の話し方しか、太郎について気になる点はない。
c. 太郎について気になる点は、彼の話し方だ。

(17b)は、元のコンピュータ文の A, B の語順を入れ替えた結果、先行詞である「太郎」が代名詞「彼」より後ろに生起している。よって、(17b)'のように入れ替えると自然な文になり、容認性が上がる。

- (17b)' 太郎の話し方しか、彼について気になる点はない。

- (18) a. *幹事だけ、あそこに立っているひとだ。
b. あそこに立っているひとしか、幹事ではない。
c. 幹事は、あそこに立っているひとだ。

- (19) a. *花子の仕事だけその会議の通訳だ。
 b. その会議の通訳しか花子の仕事ではない。
 c. 花子の仕事はその会議の通訳だ。

(24)は、西山(2003)において倒置指定文に分類されるコピュラ文である。しかし、上記の例文とは各名詞句のSR式が異なり、名詞句Aは v_n 型、名詞句Bは p_n 型(attribute)である。

- (24) a. *この種の実験で一番大切なことだけ、その実験室の温度だ。
 b. その実験室の温度しか、この種の実験で一番大切なことではない。
 c. この種の実験で一番大切なことは、その実験室の温度だ。

(24b)は、元のコピュラ文のA, Bの語順を入れ替えた結果、先行する文中の要素を指す「その」が文頭に生起しているため、「その」を削除した(24b)'のほうがより自然な文となる。

- (24b)' 実験室の温度しか、この種の実験で一番大切なことではない。

(84)(85)の名詞句のSR式は、(24)と同じで、名詞句Aは v_n 型、名詞句Bは p_n 型(attribute)である。これらは例外として扱う。

- (84) a. *彼女の秘密だけ、年齢だ。
 b. 年齢しか、彼女の秘密ではない。
 c. 彼女の秘密は、年齢だ。
- (85) a. *事件の鍵だけ、本当の殺害現場だ。
 b. 本当の殺害現場しか、事件の鍵ではない。
 c. 事件の鍵は、本当の殺害現場だ。

(108)のように、サ変動詞の語幹が v_n 型として生起することもある。

- (109) a. *当選だけ松本氏だ。
 b. 松本氏しか当選ではない。
 c. 当選は松本氏だ。

(110)(111)のように、名詞句Aが「形容詞／形容動詞＋形式名詞ノ」という形式である場合も、分類2に含まれる。

- (110) a. *学校までの交通手段で便利なのだけ、電車だ。
 b. 電車しか、学校までの交通手段で便利なのはない。
 c. 学校までの交通手段で便利なのは、電車だ。

- (111) a. *怖いだけ、このお化け屋敷だ。
 b. このお化け屋敷しか、怖いのはない。
 c. 一番怖いのは、このお化け屋敷だ。

以上の検証結果から、分類2のコピュラ文に生起する名詞句A, BのSR式について、(112)の一般化を行う。

- (112) 分類2における名詞句A, BのSR式

$A[v_n] \wedge B[x_n / e_n]$ ダ

名詞句A：オブジェクトとの同定は行われない

名詞句B：オブジェクトとの同定が可能

ただし、以下の場合例外

$A[v_n] \wedge B[p_n(\text{attribute})]$ ダ

名詞句A：オブジェクトとの同定は行われない

名詞句B：オブジェクトとの同定は行われない。

5.3. 分類3

分類3⁶の名詞句A, Bは、いずれも x_n 型または e_n 型となり、それぞれが異なるオブジェクトとの同定が可能である。

- (113) a. そのブランドだけ岩田屋の7階だ。
 b. *岩田屋の7階しかそのブランドではない。
 c. 岩田屋の7階しかそのブランドはない。
 d. そのブランドは岩田屋の7階だ。
 e. そのブランド₁は岩田屋₂の7階₃だ。

⁶ 分類3は、「BシカA〜ナイ」の述部表現の違いにより容認性の可否が異なり、「BシカAデハナイ」という形式のみ容認可となる。よって、容認性に違いが生じることを明確に示すために、例文c.「BシカAデハナイ」と例文d.「BシカA(ハ)ナイ」に分けて検証を行う。

- f. x_1 : 類=ブランド
 p_2 : 場所()=岩田屋
 x_3 : 階数=7階 | p_2

以下の(27)(28)は、西山(2003)において「所在コピュラ文」に分類されるコピュラ文である。名詞句 A, B の主要部(head)の SR 式は、ともに x_n 型である。

- (27) a. お母さんだけ、台所だ。
 b. *台所しか、お母さんではない。
 c. 台所しか、お母さんはいない。
 d. お母さんは、台所だ。

- (28) a. 洋子の鞆だけ、車の中だ。
 b. *車の中しか、洋子の鞆ではない。
 c. 車の中しか、洋子の鞆はない。
 d. 洋子の鞆は、車の中だ。

(114)は名詞句 A, B がともに e_n 型、(115)は名詞句 A が x_n 型で名詞句 B が e_n 型、(116)は名詞句 A が e_n 型で名詞句 B が x_n 型である。いずれの場合も、名詞句 A, B は x_n 型または e_n 型となり、ともに指示性を持つ名詞句である。

- (114) a. 浜崎あゆみのライブだけ、来年の秋だ。
 b. *来年の秋しか、浜崎あゆみのライブではない。
 c. 来年の秋しか、浜崎あゆみのライブはない。
 d. 浜崎あゆみのライブは、来年の秋だ。

- (115) a. 一太郎だけこのパソコンだ。
 b. *このパソコンしか一太郎ではない。
 c. このパソコンしか一太郎はない。
 d. 一太郎は冬だ。

- (116) a. 卒論生の発表だけ、4階の会議室だ。
 b. *4階の会議室しか、卒論生の発表ではない。
 c. 4階の会議室しか、卒論生の発表はない。
 d. 卒論生の発表は、4階の会議室だ。

以上の検証結果から、分類3のコピュラ文に生起する名詞句 A, B の SR 式について、(117)の一般化を行う。

- (117) 分類3における名詞句 A, B の SR 式
 $A[x_n/e_n] \wedge B[x_n/e_n]$
 名詞句 A : オブジェクトとの同定が可能
 名詞句 B : オブジェクトとの同定が可能
 A と B が同定を行うオブジェクトは異なる

5.4. まとめ

検証結果を以下の表にまとめた。コピュラ文「A ハ B ダ」に生起する名詞句 A, B をダケ/シカ文に生起させたのが、縦の列の「A ダケ(ガ)B ダ」「B シカ A~ナイ」である。それぞれのダケ/シカ文の容認性の可否を検証した結果を、○/×にて記している。

容認性の可否のパターンは三種類となり、それに基づいてコピュラ文を三種類に分類した。

コピュラ文 「A ハ B ダ」 ダケ/シカ文	分類 1	分類 2	分類 3
A ダケ(ガ)B ダ	○	×	○
B シカ A~ナイ	×	○	○/×**

※容認可となるのは「B シカ A ハ{ナイ/イナイ}」の場合のみであり、文末の否定表現がそれ以外の場合は容認不可となる。

西山(2003)の分類における「指定文」「倒置同定文」は分類 1 に、「倒置指定文」は分類 2 に、「所在コピュラ文」は分類 3 に、それぞれ含まれる。

各分類における名詞句 A,B の SR 式は、以下の通りである。

(106) 分類 1 における名詞句 A,B の SR 式

$$A[x_n/e_n] \wedge B[p_n(\text{value})/v_n] \text{ダ}$$

名詞句 A：オブジェクトとの同定が可能

名詞句 B：オブジェクトとの同定は行われない

ただし、以下の場合例外

$$A[p_n(\text{attribute})] \wedge B[v_n] \text{ダ}$$

名詞句 A：オブジェクトとの同定は行われない

名詞句 B：オブジェクトとの同定は行われない

(112) 分類 2 における名詞句 A,B の SR 式

$$A[v_n] \wedge B[x_n/e_n] \text{ダ}$$

名詞句 A：オブジェクトとの同定は行われない

名詞句 B：オブジェクトとの同定が可能

ただし、以下の場合例外

$$A[v_n] \wedge B[p_n(\text{attribute})] \text{ダ}$$

名詞句 A：オブジェクトとの同定は行われない

名詞句 B：オブジェクトとの同定は行われない。

(117) 分類 3 における名詞句 A,B の SR 式

$$A[x_n/e_n] \wedge B[x_n/e_n] \text{ダ}$$

名詞句 A：オブジェクトとの同定が可能

名詞句 B：オブジェクトとの同定が可能

A と B が同定を行うオブジェクトは異なる

本論文では、生起する語彙がオブジェクトとの同定が可能か否かに基づき、コピュラ文を三種類に分類した。先行研究(西山(2003))では、生起する名詞句の「指示性」に基づいて分類を行っていた。本論文では「指示性」という概念の曖昧性を指摘し、linguistic SR に基づく分類を行った。その結果、先行研究において明示的に定められていなかったコピュラ文の相違点について、明確な説明が与えられたといえる。

本論文で行った分類の結果、コピュラ文「A ハ B ダ」は、基本的に A, B のいずれかまたは両方がオブジェクトと同定可能な語彙となるが、例外として A, B がともにオブジェクトと同定されない場合があることが判明した。この例外に生起するのが、 $p_n(\text{attribute})$ 型である。検証結果から、 $p_n(\text{attribute})$ 型はオブジェクトと同定されない語彙であるにもかかわらず、オブジェクトと同定可能な x_n 型、 e_n 型と同じような働きをしていることが観察された。しかし、 x_n 型、 e_n 型は、 v_n 型、 $p_n(\text{value})$ 型と共起するが、 $p_n(\text{attribute})$ 型は、 $p_n(\text{value})$ 型とは共起しない。

この $p_n(\text{attribute})$ 型がどのような機能を持ち、他の語彙と修飾関係を構築する際にどのような働きをするのかについて、より詳しく考察する必要があると考えられる。

参考文献

- 上山あゆみ (2011) 「統語論に基づく新しい意味理論の提案」 『人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B101』, pp.35-40.
- 上山あゆみ (印刷中) 「特定事物への指示と語彙タイプ」 『文学研究』 第 109 輯.
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』 ひつじ書房
- 熊本千明 (1995) 「同定文の諸特徴」 『佐賀大学教養部紀要』 第 27 卷, pp.147-164.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語のとりたて詞の研究』 ひつじ書房

+